

神話の変奏と国号「日本」

神野志 隆光

「日本」は、元来は王朝名として設定されたものであり、中国王朝の承認を得て成立したのであった。古代中国の世界像のなかに得られたものだが、『日本書紀』は、それを、朝鮮との世界関係をなうものとして「歴史」のなかに意味づける。神話によって保障されて成立したものではなかったのである。平安時代の講書からふりかえって見ても、そのことは明らかである。

「日本」が神話的物語と結びつくのは、中世においてであった。講書においては、朝鮮との世界関係ということは見失われているのであり、中国から名づけられた「日本」として受け取るだけなのである。神話の変奏のなかで、はじめて神話的に保障されることとなった「日本」というべ

きである。はじめから神話的に成り立つというようなものではなかったのである。いわゆる神仏習合だが、アマテラスⅡ大日如来とする神話として作り直し、「日本」とは、大日の本国の謂いだという意味づけが成り立ったのである。その「日本」をめぐる神話は、近世には意味を失う。国学者たちの、テキストに即して見るといふ態度による神話の再建（注釈）というかたちで成されたのは、この、「日本」Ⅱ大日／本国なる神話的物語を破却したが、「日本」についてのあらたな物語を作り直すことはなかった。それが、国民的合意をもたない、近・現代の「日本」ということに繋がっているというべきであろう。

（東京大学教授）